

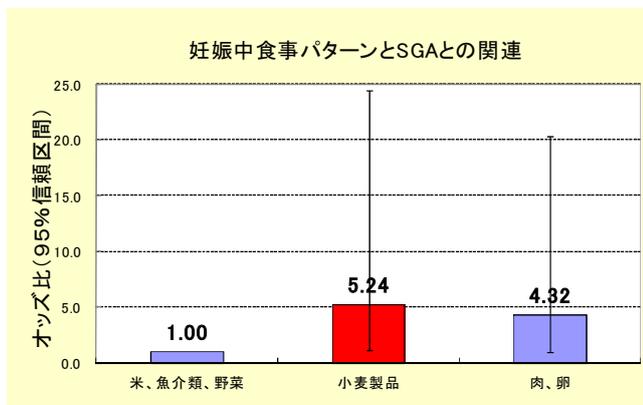
## 大阪母子保健研究 2-9ヶ月時追跡データの結果 食品摂取パターンと出生時体格との関連

**背景：**妊娠中の母体の栄養状況は胎児の発育に大きく影響します。習慣的な食品の摂取状況を総合的にとたえる食品摂取パターンと出生時体格に関する疫学的なエビデンスは、特に非西洋諸国でほとんどありません。

**方法：**大阪母子保健研究のベースライン調査と生後2-9ヶ月時の第1回追跡調査に参加し、正期産単胎で生まれた803組の母子を対象としました。出生時体重を残差法により在胎数で標準化し、平成12年乳幼児身体発育調査で報告された男女別身体発育曲線の10<sup>th</sup>-センチル未満を胎内発育遅延児

(small-for-gestational-age;SGA) としました。食事歴法質問調査票を用いて33の食品群摂取状況からクラスター分析により3つの食事パターンを抽出しました。母親の年齢、出産経験、身長、妊娠前のBMI、妊娠中の体重増加量、ベースライン時の妊娠週数、喫煙状況、食習慣の変化の有無、サプリメント利用状況、身体活動レベル、家族構成、職業、収入、学歴、調査時期、妊娠中の医学的な異常の有無の影響を交絡因子として補正しました。

**結果：**クラスター分析により、「肉、卵」食事パターン (n=326)、「小麦製品」食事パターン (n=303)、「米、魚介類、野菜」食事パターン (n=174) に分けられました。「米、魚介類、野菜」食事パターンの母親を基準として、「小麦製品」食事パターンの母親は統計学的に有意に、5.24倍SGAの子供を持つリスクが高まりました。「肉、卵」食事パターンでは、4.32倍SGAのリスクが高まりましたが、統計学的に有意ではありませんでした。



**結論：**妊娠中、パンやお菓子、ソフトドリンクの摂取が多く、魚や野菜の摂取の少ない「小麦製品」食事パターンの母親は胎内発育遅延児を出産するリスクを高めるのかもしれない。

**出典：** Okubo H, Miyake Y, Sasaki S, Tanaka K, Murakami K, Hirota Y, Osaka Maternal and Child Health Study Group. Maternal dietary patterns in pregnancy and fetal growth in Japan: the Osaka Maternal and Child Health Study. Br J Nutr. 2012; 107: 1526-1533.